



**世界が  
滅ぶ  
たびに**

**@onaishigeo**

## 一つ目の未来

---

カタッと音がした。

主を失って久しい猫用ドアの音。  
腹を空かせた野良猫が来るかもと思い、  
塞ぐのを止めた小さなドア。  
存在すらすっかり忘れていた。

どうせ風の仕業だろうと分かっているけども、  
確認しないではいけない。

まあ...確かに人類は、俺を残して滅びたが、  
猫は案外生き残ってるかもしれないしね。

## 二つ目の未来

---

「鬼は外！」

炒った豆を思い切り投げつけながら、声を漕らして男は叫んだ。

「パパ頑張ってる！」

家族が男を励ます。

「福は内」

しかし疲労は限界に達していた。

「鬼は...」

そしてとうとう男は力尽き、その場に倒れた。

と同時に、大勢の鬼が玄関や窓を打ち破り屋内に突入する。

西暦2020年。

追儼の儀の結界が破れ、鬼が人を喰う世界。

## 三つ目の未来

---

「優しい人になる優しい人になる優しい人になる」

朝の儀式。

鏡に向かって笑顔の練習もする。

そうしていつもの場所にやってくる。

「ごめんね、私おこりんぼうだから。

でも反省したの。

もう絶対怒らないから。

だからもう出て来て大丈夫だよ」

笑顔で優しく語りかける。

しかしシェルターの強固な扉は激しく腐食し閉じられたまま。

「どうして出てこないんだろ。

もう一万年も経つのに」

少女は真っ赤な空を見上げ、ため息をついた。

## 四つ目の未来

---

「悲しくていいの」  
楽しい物語を読まない君。

「幸せになんかならなくていいし」  
ハッピーエンドが嫌いな君。  
でも君は、その割に幸せそうに笑うね。

「だって、私が不幸なら、誰かに幸せが回るってことでしょ？  
パラドックスみたいだけど、私が不幸なら私は幸せ」  
...そんな幸せそうに笑っている君は、  
でもやっぱり幸せなんじゃないかな。  
それと少し言いつらいのだけど、  
本当に好きなのは、他人の不幸だったりして。

「そっかあ。だからこの星、滅んじゃったのかな。  
難しいね。わたし神さま失格だよ」

## 五つ目の未来

---

仮に自分が最後の人類だとして、  
それでも産まれて良かったと思えるのだろうか。

何度も繰り返し想像する。  
もちろん試してみたい。  
でも僕は無責任な事はしたくない。

「この仕事は少しお気楽な方がいいよ」  
先代の言葉だ。

でもまたあっさり滅亡させてもな一。

超新星となった太陽を眺めながら思案する。  
今度の創造主は、ひどく心配性だった。

## 六つ目の未来

---

孤独が寂しいなんて考えたこともなかった。

給食や遠足も一人で平気だった。

3度の修学旅行でも単独行動を貫いた。

卒業文集には「百万回生まれ変わっても孤独を選ぶ」と書いた。

誰も気づかないかもしれない。

でも本当は、こんな孤独な僕に気づいてほしかった。

でもまさか、

卒業文集の願いが実現するとは...

チャンスはあと99万回残っているって、

この静かな世界で、誰が気づいてくれるんだ。

## 七つ目の未来へ

---

未来未来のお話らしい。

お爺さんもお婆さんもまだ産まれてないし、  
そもそも二人の親すらまだ存在しないのだから、  
何処に大きな桃を隠せばいいのか非常に悩む。

しかしこれは千年かけた壮大なイタズラだ。

俺の遥か子孫よ。  
滅びてなければ、  
大馬鹿な先祖のメッセージを、  
どうか心ゆくまで楽しんでくれ。



## 八つ目の未来

---

「この星あげる」

小さな星を手にして姉が言った。

「え？それじゃ姉さんの分が」

「私はいいの。あなたより大きいんだから、またすぐに採れるし」

そう言って優しく微笑んだ姉はもういない。

夜空には満天の星。

いくら摘んでも尽きない星を、

今夜もまた主の為に選りすぐる。

「あの青い星、綺麗だったな」

たまにあのとき姉からもらった星のことを思い出す。

僕は星を摘む一族の末裔。

## (ボーナストラック)

---

### 一つ目のノア

ノアの方舟に乗らずして生き延びた人たちがいた。  
現在も人類は「ノアの子孫か、子孫でないか」に二分できたが、  
何故か両者が争った過去はないし迫害の事実もない。

「それって不思議。いったいどうして？」

ノアに選ばれたんであって神に選ばれたわけじゃないからね。  
誰も羨むようなことじゃないってわけ。

「なんかノアって可哀想」

### 二つ目のノア

ノアの箱船によって救われた人類は、  
その偉業を称えて至る所にノア像を立てた。  
このため今では工事現場からノア像がゴロゴロ発掘される。  
最終処分場はノア像であふれ、  
山に放棄する違法業者が続発し、  
豪雨になるたびノア像が雪崩を打って人家に押し寄せた。

「ノア像の洪水だ！」

### 三つ目のノア

「ノアって確か人間は自分の家族だけ箱船に乗せたんだよね」

「確かそうだったよ」

「それなのにさ、どうして今、人類の遺伝子配列は多様なんだろうね」

「...はっ、家族とは偽りで実は愛人を潜ませていたとか？」

「やばい。俺たち、とんでもない秘密にたどり着いてしまったかも」

翌日、一人は頭に隕石が当たり、  
もう一人は路上でバッファローの群れにひかれ、共に死を遂げた。

## 世界が滅ぶたびに

<http://p.booklog.jp/book/36336>

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36336>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36336>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.